

## 事例 14 : 徘徊の予防

### 対象者の状況

- ⇒ 79歳、女性 要介護度4、寝たきり度A、認知症高齢者の日常生活自立度M
- ⇒ 徘徊、盗癖がひどく、職員が注意をし、そばにいても人の物を物色したりさわったりし、他の利用者からも良く思われていないような状態であった。

### 身体拘束の状況

寝たきり度がAと、歩行も可能な状態であり、安全ベルト等による身体拘束は行っていなかった。

居室に隔離することはしていないが、施設内を自由に動くとしても職員が声をかけて止めてしまったり、見守りをしている職員の仕事の都合（動き）にあわせて、本人の動きを制限したりするなど、常に相手の行動を職員が目届く範囲内でコントロールしがちであった。

職員が当番を決め、他のことをしながら見守るが、ほんの少しの間にいなくなったりするため、どうしても本人の自由を取り上げてしまいがちである。

### 対応方法の検討

職員のペースに合わせてもらうのではなく、職員の側ができるだけ本人のペースに合わせた対応ができないか、検討を行った。

### 対 応

施設内の空室スペースに週3回程度、1回1～2時間の時間を設け、認知症や徘徊の方（10名ほど）に集まっていただき、話をしたり、ティータイム、小レクリエーション等のグループワークを行っている。

本来ならば、マンツーマンでの対応を行いたいが、できる範囲のことを考え、なるべく自由に過ごされる時間を多く持つるように、他にも徘徊しがちの方と一緒に、別のことに集中できる時間を作っている。

### 経 過

グループワークの中では、触られて怒る人もなく、食べることも自由に過ごせる。出ていこうともせず、笑顔も見え、おだやかな表情で過ごしておられる。今後もこのような日を増やす予定である。

**【着眼点（ポイント）】**

職員の動きに合わせて一緒に動いてもらったりすることで本人の自由を取り上げていると感じ、物理的な拘束だけではなく、本人の意に反した行動をとってもらうことも身体拘束のひとつと考えて、対応している点に注目したい事例である。